





行幸 細 蔡邕天子車駕 皇親 龍駒 賜以食帛 爵有級 或賜田
相故謂之幸 晋灼曰 民臣被其德 以為徽祥也 又顏師古云 幸者可慶幸也 故福喜之事皆
稱為幸

試樂 武樂 由東 河 武樂の試も色 花 武樂の試も色 花 武樂の試も色 花
武樂の試も色 花 武樂の試も色 花 武樂の試も色 花

時依 勅 改 盤波調 但 詠 小野 堂 朝臣 作 詠 小野 堂 朝臣 作 詠
詠 小野 堂 朝臣 作 詠 小野 堂 朝臣 作 詠

鳥天 論 云 在 鼓 中 未 出 聲 鳥天 論 云 在 鼓 中 未 出 聲
鳥天 論 云 在 鼓 中 未 出 聲 鳥天 論 云 在 鼓 中 未 出 聲

如來 音 聲 何 聖 主 天 中 如來 音 聲 何 聖 主 天 中
如來 音 聲 何 聖 主 天 中 如來 音 聲 何 聖 主 天 中

時苦 空 我 常 樂 我 淨 也 時苦 空 我 常 樂 我 淨 也
時苦 空 我 常 樂 我 淨 也 時苦 空 我 常 樂 我 淨 也

和 秘 大 鏡 之 幸 雅 明 七 葉 小 路 神 息 之 幸 耳 雅 明 七 葉 小 路 神 息 之 幸 耳
和 秘 大 鏡 之 幸 雅 明 七 葉 小 路 神 息 之 幸 耳 雅 明 七 葉 小 路 神 息 之 幸 耳

是や佛の山迎凌頓伽のふるまへん
わらわらとみこころれやさめぬ
しと神くらやと
とるまふ

うらぐくのつさつと
ざりてつねにりと
わらわらとみこころれや
しと神くらやと
とるまふ

十代
招撫のやうなひらけしてゐる多しり 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

春のよもぢういふすす 花 延喜十六年三月沙賀有詔令喚皇太子之

くものあつたものぞく 何れもあつたものぞく

日への屋敷の山はあひゆせ 日への屋敷の山はあひゆせ

うめりされてはをばりて 細 赤も赤もくちをよりての

へさしてあつたものぞく 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

経てはあつたものぞく 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

ふらうかして 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

也垣よまては内ををばり 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

とをばりて 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

りうそくのさうりうの 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

細 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

ハ諸君よまては内ををばり 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

りうそくのさうりうの 孟 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

細 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

明 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

例 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

五十 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

六年 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

保 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

忠 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

菊 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

十 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

人 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

の 招撫のやうなひらけしてゐる多しり

かり又つり花とせしむるは
 きりもさきつらとわねし
 そハ後の紅染ふしとていり
 ハわや 細河云 律有取綾
 手故云入綾下 花云文入
 向くて西に西に西に西に
 町名三村山と尋ん入わや
 の色やもあしとてとて後
 顕昭註云 律ハ八入わやと
 てさうにわて入てか
 りてさうてさうてさうて
 付名のハわやの声やとて
 ろしとてさうてさうて

つひえやわめをさうして
 てさうてさうてさうて
 けせのさうてさうてさうて
 とんやうのさうてさうて
 ぐりわんてさうてさうて
 んざうてさうてさうて
 んざうてさうてさうて
 んざうてさうてさうて
 んざうてさうてさうて
 んざうてさうてさうて
 んざうてさうてさうて
 んざうてさうてさうて

正四位下よりつりて

正四位下よりつりて

さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上

さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上
 さうれまへ 細葉上

母方ハ三月... 此疾如...

河物忌令曰祖父祖母又...

服七日服三月孟日...

八十二月晦日...

日ハ除服とあり...

又親とわけて...

八母上ハ...

...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

いもやびご... 細六条の山息...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

胎もはく... 胎もはく...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

まゝの人をいふはうらや
まゝは保は保人の人ま
推量させんと人のま
ゆるすてはまゝ

おのろりし 細
所々ゆるぐも保の保と
まゝくも保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の

ハのあそび合極もくまの
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の

細何と
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の

ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の

ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の
ゆるすては保は保人の

こゝろのしつねのあまの
盃をつれのあまのあま

つれづれより明き
細原のつれづれより明き
とまじりゆく足あふみの
かまかたよおんあふみの
しづめてしづめてしづめて
のあまのあま

もろくろと表あま
細い路のつれづれより明き
如切如切如切如切如切
侘翁赫翁喧翁かたし乃
文藝あり 仰あまのあま
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き

ちくちくあまの
天のあまのあまのあまの
のあまのあまのあまの
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き

つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き
つれづれより明き

あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

おわりのひまきささきをたれば
原の葵は方へやういずる
んとおまふおあまもくも
の上はとびうられてま
ちりぬをまじくおわいの
せりりりり
いましてその人とも
上筋きくはされとあれも
一又まきよはほやをされ
まじりておむれらむと
まきよとまきよにまじり
わきりてあまきよは
あまきよ
おまきよはいよひて
てはおまきよはてまきよに
まきよの人はおまきよに
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に

まきよのひまきささきをたれば
原の葵は方へやういずる
んとおまふおあまもくも
の上はとびうられてま
ちりぬをまじくおわいの
せりりりり
いましてその人とも
上筋きくはされとあれも
一又まきよはほやをされ
まじりておむれらむと
まきよとまきよにまじり
わきりてあまきよは
あまきよ
おまきよはいよひて
てはおまきよはてまきよに
まきよの人はおまきよに
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に

てまきよは

おまきよは
原の葵は方へやういずる
んとおまふおあまもくも
の上はとびうられてま
ちりぬをまじくおわいの
せりりりり
いましてその人とも
上筋きくはされとあれも
一又まきよはほやをされ
まじりておむれらむと
まきよとまきよにまじり
わきりてあまきよは
あまきよ
おまきよはいよひて
てはおまきよはてまきよに
まきよの人はおまきよに
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に

おまきよは
原の葵は方へやういずる
んとおまふおあまもくも
の上はとびうられてま
ちりぬをまじくおわいの
せりりりり
いましてその人とも
上筋きくはされとあれも
一又まきよはほやをされ
まじりておむれらむと
まきよとまきよにまじり
わきりてあまきよは
あまきよ
おまきよはいよひて
てはおまきよはてまきよに
まきよの人はおまきよに
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に
おまきよはてまきよの人に

うんがうらこの人
 如のちうめりてつ警
 ますんふうふうらさ
 着しうをうて花藏人
 私記才十三云御影御髮
 事侍臣之同撰堪事之人
 供立定例皆着舊色袍
 謂之御御深紫色縮也
 納藏人取今東海人
 どりゆびんよふうらも
 笠の子ぬの重衣とまて
 程假さうとゆらうさの
 人とまて
 こもかりうら
 ほらほほゆらうてそそ奉
 いせいごてあまうられ
 笑はよこまつ
 うらり 河編_{河編}とそそ
 扇とつうらうめもつえ
 ぬて多扇の惣名なり
 掃うらりのてふとあせこ
 あふ扇とすのたふ教とく
 さんあふ
 まりハ 細ハのま清濁_{細ハ}

孟のあうめりて
 の内うらりうらりまはる
 はまれまはる
 はせまひめら後よまはる人もあはるての
 侍つねらりもまはるはまらるる
 はゆめさうさうさうさうさうさうさうさう
 りのまらげよまはるはまらるる
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 どがよまらるるさうさうさうさうさうさう
 ろうまらるるはまらるるさうさうさうさう
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 はまらるるはまらるるはまらるるはまらるる
 細ハのま清濁
 孟のあうめりて
 の内うらりうらりまはる
 はまれまはる
 はせまひめら後よまはる人もあはるての
 侍つねらりもまはるはまらるる
 はゆめさうさうさうさうさうさうさうさう
 りのまらげよまはるはまらるる
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 どがよまらるるさうさうさうさうさうさう
 ろうまらるるはまらるるさうさうさうさう
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 はまらるるはまらるるはまらるるはまらるる
 細ハのま清濁
 孟のあうめりて
 の内うらりうらりまはる
 はまれまはる
 はせまひめら後よまはる人もあはるての
 侍つねらりもまはるはまらるる
 はゆめさうさうさうさうさうさうさうさう
 りのまらげよまはるはまらるる
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 どがよまらるるさうさうさうさうさうさう
 ろうまらるるはまらるるさうさうさうさう
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 はまらるるはまらるるはまらるるはまらるる
 細ハのま清濁
 孟のあうめりて
 の内うらりうらりまはる
 はまれまはる
 はせまひめら後よまはる人もあはるての
 侍つねらりもまはるはまらるる
 はゆめさうさうさうさうさうさうさうさう
 りのまらげよまはるはまらるる
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 どがよまらるるさうさうさうさうさうさう
 ろうまらるるはまらるるさうさうさうさう
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 はまらるるはまらるるはまらるるはまらるる
 細ハのま清濁

孟のあうめりて
 の内うらりうらりまはる
 はまれまはる
 はせまひめら後よまはる人もあはるての
 侍つねらりもまはるはまらるる
 はゆめさうさうさうさうさうさうさうさう
 りのまらげよまはるはまらるる
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 どがよまらるるさうさうさうさうさうさう
 ろうまらるるはまらるるさうさうさうさう
 うらつさうさうさうさうさうさうさうさう
 はまらるるはまらるるはまらるるはまらるる
 細ハのま清濁

このいづれも 相ふま湯せり 孟如
をのこ内侍の好さよ
ふん
あつちのこころのうきま
孟双中ねの原内侍はな
せりりよのうきま
この原の中へまはるな
せりりよのこころのうきま
みゆりよのこころのうきま
細りよのこころのうきま
孟のうきまはな
あつちのこころのうきま
ふん
孟双中ねの原内侍はな
せりりよのうきま
この原の中へまはるな
せりりよのこころのうきま
みゆりよのこころのうきま
細りよのこころのうきま
孟のうきまはな
あつちのこころのうきま
ふん

ついでこの好さよ
由はよ中ねの原内侍はな
せりりよのうきま
この原の中へまはるな
せりりよのこころのうきま
みゆりよのこころのうきま
細りよのこころのうきま
孟のうきまはな
あつちのこころのうきま
ふん
孟双中ねの原内侍はな
せりりよのうきま
この原の中へまはるな
せりりよのこころのうきま
みゆりよのこころのうきま
細りよのこころのうきま
孟のうきまはな
あつちのこころのうきま
ふん

あつちのこころのうきま
ふん
孟双中ねの原内侍はな
せりりよのうきま
この原の中へまはるな
せりりよのこころのうきま
みゆりよのこころのうきま
細りよのこころのうきま
孟のうきまはな
あつちのこころのうきま
ふん

あつちのこころのうきま
ふん
孟双中ねの原内侍はな
せりりよのうきま
この原の中へまはるな
せりりよのこころのうきま
みゆりよのこころのうきま
細りよのこころのうきま
孟のうきまはな
あつちのこころのうきま
ふん

ハ衣のされと帯又用よりとどの世も主上の清帯ハ涉引るぞいぬれと用後夜の
赤衣ハ二藍或花田と帯よりりて若して係氏を宰相中將うとあつたの衣なり
中將ハ年ハよりりこれ官のひきとよりりて二藍の赤衣と用よりり一官の
よりり宿法の家と用官のひきとよりりて二藍の赤衣と用よりり一官の
よりり二わひかりぬびのとよりりて中將ハ二藍やれわがぬるぞよりりいぬる
一とよりり

盃 簪袖 端袖 盃 簪袖也或後よりり此の簪 將のまへ不用之 併係のぬる
衣の袖よりりてよりり

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

わりの但むしり帯れうとくいささのち今の帯れうとくいささのちとあつたり中將
の帯ハ二藍やれた帯ハ二花田の帯とくいささのち今の帯れうとくいささのちとあつたり
一もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
併ハ中將と内將との帯ハ二花田の帯とくいささのち今の帯れうとくいささのちとあつたり
よりりてもささぬとく

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪 細 簪 簪

とこの心 花がよのこ

みゆりうらやまの月ついで
うらやまの月ついで
人の向ともまろむり
暮してうらやまの月ついで
とこの心はうらやまの月ついで

うらやまの月ついで
何ぞの町よの夢の上よ
物のうらやまの月ついで
まろむり
藤原の兄弟の親ま
ぶにとけり

うらやまの月ついで
何ぞの町よの夢の上よ
藤原の兄弟の親ま
ぶにとけり

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

みゆりの月ついで

藤原の兄弟の親ま
ぶにとけり

七の月ついで

帝嫡妃月皇后後漢書曰
以備内職為后
下畧
細考つたの女内中
立御
七の月ついで

年七月皇太后より
に撫して去り
七の月ついで

細天文八五廿九
七の月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

うらやまの月ついで

源氏の母や中御すくまりぬ

河わつ文 冷泉院の外御舅

親王を遣りて入居りてさう

しらすべいご人あしとて

保氏執政光大后継有例死

仰うらまきせして執政は右

氏をすてしつとて

さきでんいつとて

あつかの寵をとほすまふ

いととて

されとまふまの世せらうぬ

われはうこうひるさ位に

とゆりめりのとゆりしそ

ゆりてせたり

細出版も藤原とて藤原の

内累とて 師友益と右子ま

ふふとゆかうにたふみあう

されと米雀院の代りつと

ぬれいさうひるさ位に

皇太后よりなりまふいと

けいまふまの 公教院あかう

ことさうとてまをせしけ

よとつり

み余臣 細在余年書に後

あしつらあきつらとて

しつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

かづらひちりうぬぬ 細右妻の内版のふえ冷泉院の師東文

坊ふとかりめとて

さうさうせたりまふ

かまをばせたり

はつとかりて執政はあかあか

源氏の母やけげとて

あつかの寵をとほすまふ

いととて

されとまふまの世せらうぬ

われはうこうひるさ位に

とゆりめりのとゆりしそ

ゆりてせたり

細出版も藤原とて藤原の

内累とて 師友益と右子ま

ふふとゆかうにたふみあう

されと米雀院の代りつと

ぬれいさうひるさ位に

皇太后よりなりまふいと

けいまふまの 公教院あかう

ことさうとてまをせしけ

よとつり

み余臣 細在余年書に後

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

あしつらあきつらとて

まつりつらりと 細はまの
 まつりの後ろく 細はまの
 あまのついでに 源の容貞
 まつりのあはれをい
 へばりてはよどと
 ぬくまありまはあま
 らんらん
 月日れひり 細 是も保
 はぬまありまをい 肝原
 氏と冷泉院とのあり
 へぬを月と日れ克のた
 やまゝして細はまのこ
 ろゆくは法人のどくこ
 し

まつりつらりと 細はまの
 まつりの後ろく 細はまの
 あまのついでに 源の容貞
 まつりのあはれをい
 へばりてはよどと
 ぬくまありまはあま
 らんらん
 月日れひり 細 是も保
 はぬまありまをい 肝原
 氏と冷泉院とのあり
 へぬを月と日れ克のた
 やまゝして細はまのこ
 ろゆくは法人のどくこ
 し

